獲物を乗せるための荷車をひきながら、砂浜を南へ少し行く。荷車には空っぽの木箱や樽が積んであり、人一人が座れるほどのスペースにネックが座っていた。低い崖を慎重に下りて、ネックとノランは海岸にたどり着いた。

ここはフィルスト大陸最南のサンゴ礁海岸で、四キロにも渡る砂浜が続いている。「フィネイル海流」と呼ばれる潮流がたくさんの漂着物を運んでくるので、嵐があった翌日などは海岸が埋め尽くされんばかりになるくらいだ。

二人が漂着物のハンティングを始めたこの頃は流木漂着物が多く流れ着く日とそうでない日とでバラつきがあったが、ここ数ヶ月は漂着物が増えてきており、フィルスト大陸では見ないような調度品や鉱石、金貨の入った小箱を見つけたこともある。しかし、そういった価値あるものが流れ着いているものは稀も稀で、たいていは木片や船の残骸や海獣の骨や漁具といったガラクタばかりだ。

「漂着物ハンターの腕がなるぜ～！」

ノランは左の手で右肩を掴み、腕をぐるぐると回しはじめた。

浜辺に立ったネックとノランは、手庇をして、ざっと周囲を見渡した。

海水の透明度は、浜から海底の小魚やヒトデが見えるほどである。陽の光を反射して、広大な海原がきらきらと輝いている。空と海が溶け合って、水平線の彼方が白んでいた。船は一艘もない。

二人は漂着物が溜まっているところに見当をつけて、二手に分かれて探索を始めた。

二時間ほどやったところで、二人は休憩を取ることにした。

アリーベの村はひとつの民家から別の民家まで結構距離がある。時々、ひと仕事終えたリアムが様子を見に来ることはあるが基本的には昼食はリアムとは合流せず、各々が各々で仕事の合間に取ることにしている。

器用に崖を登り、海からすぐにある草原に立つ、古さな楠の木陰に腰を下ろして昼食を取った。

「成果はどうよ？」

サンドイッチを頬張りながらノランはネックに訊いた。

ネックは食事の入ったバスケットから林檎を出しながら、

「んー、ぼちぼち。そっちは？」

ネックが尋ね返すと、ノランは足元に置いていた木箱をがさがさと漁りだし、木片や貝殻、ガラスの破片などを避けて屋根瓦の破片を取り出した。

「どうよ？　研究に貢献できそうだぜ？」

ネックはにっと笑うと皮製の水筒から水を飲んだ。

「残りは工作いきだな」

「だな」

珍しい漂着物を拾った時は別の街に持っていき、漂着物研究のために寄付をしている。木くずや貝殻など捨てても良さそうなものはリアムが細工を施し装飾品や雑貨として家に飾ったり別の街で市場で売りに出している。

ノランはぼーっと海を見つめながら、

「そういや、昨日の噴火って結局なんだったんだ？」

「んー？　ああ」

ネックは水筒の蓋を締めながら、「あれはたぶん、噴火じゃないな」

「噴火じゃない？」

ノランの問いかけにネックは黙って頷いた。

「海岸にも海面にも、火山灰や軽石がないからだよ」

ノランは言われるがまま、足元をキョロキョロ見回した。

「海底火山が噴火したら、大量の火山灰や軽石が生まれるんだ。あんな噴火があったんなら、海面が覆われるくらい火山灰や軽石だらけになってたっておかしくない」

ネックは海を見つめながら、

「でも、火山灰も軽石もんかどこにもないし海水も濁ってないだろ？　だからあの火は噴火じゃないってことだ」

ノランは「……だよなあ !? いやあ俺も変だと思ってたんだよ！」と嬉しそうに地面をバンバン叩いた。

「しっかし、なんでまた水柱なんて出てたんだろうな」

「……クジラの潮噴きとか誰かが魔法を使ったとかじゃないか？」

噴火ではなかったということこそ分かれど、その正体のことまでは分からない。

涼やかな潮風が吹き、楠の葉が大きな音を立てた。

眠たくなるほど呑気な青空に、海鳥の声が響いていた。

「魔法だと話は変わってくるけどよ。まあ、噴火なんて大層なもんじゃなくてよかったよ」

言いながらサンドイッチの最後の一欠片を口に放り込んで、ノランは立ち上がった。尻をはたき、大きく伸びをして、

「さて と、潮も落ち着いてきたし、またアレやってくるかな！」

「少し休憩して片付けたら行くよ」

「あいよ」

ひらひらと手を振って、ノランは再び海岸へ降りて行った。

ネックは荷車を背もたれにして両手を頭の後ろに組んで胡坐をかいた。

遠くなるノランの背中を見ながらふと思い出す。

「刺激、か」

新しい遊びの採用や新たな散歩スポットの開拓。生活を楽しむための工夫は凝らしている。いつまでもこんな暮らしが続いたらという想いと同時に、たしかに今の生活は繰り返しになっているとネックも感じていた。

そんな繰り返しの日々の中で昨晩の出来事は三人にとってちょっとした刺激であったのだ。

何か大きな事が起きるのではないかと。

しかしネックには分かっていた。事件を楽しめるのは対岸の火事の時だけであると。

おそらくノランもリアムも分かっているだろう。

だから、これ以上は噴火の調査の深追いをすることはない。

目の前に広がるのはいつもの穏やかな海。

ネックは手を組んで大きく伸びをすると、仕事をするために立ち上がった。